

書かれた言葉

をちゃんと

「読む」

ノンフィクション作家 関川夏央

書かれた言葉と「向き合う」ということは、書かれた言葉をちゃんと「読む」ことに尽きると私は思います。ひるがえっていいますと、書かれた言葉は意外にちゃんと読まれていないのではないかと疑っているわけです。

夏目漱石『こころ』は一九一四年に書かれ、朝日新聞に連載されました。亡くなる二年半ほど前のことで、慢性の胃潰瘍のうえに定期的に襲われる不安のせい、かなり重苦しい小説になりました。

二〇一四年は『こころ』が書かれて百年ということで、朝日新聞が『こころ』を再連載しました。それに先立ち何か書いてくれと朝日の人にいわれたので、やや気軽に引受け、再読しかけて我ながらびっくりしました。

というのは、それが初読だったからです。長い年月のうちに何度か読みかけてはやめていたのは、この作品の「暗さ」のせいだったでしょう。『こころ』は高校の国語教科書で圧倒的に多く採用されているそうですが、私にはその理由がよくわかりません。

『こころ』の登場人物は、「先生」とその妻「静」さん、「先生」の旧友で昔自殺してしまった「K」という人、それに語り手の「私」です。この中で名前が書かれているのは「静」さんだけです。

東京帝大文科大学の学生であった「私」は、鎌倉の海水浴場で「先生」と知り合い、その後「先生」の本郷の家を訪ねて、奥さんとも心置きなく話す間柄になりました。やがて「私」は大学を卒業、郷里の父親の具合が悪いので田舎に帰ります。卒業後の就職は決まっていません。何になりたいか自分でもよくわからず、「先生」も無職だし、などと思っています。父親の病状は悪化、滞在は長引きます。

そうこうするうち明治天皇が亡くなり、ひと月半後の天皇大喪の夜、乃木希典夫妻が自刃したと新聞に出ます。乃木夫人は静子といひます。

そこへ「先生」からぶ厚い手紙が届きます。それは「遺書」でした。

「先生」は越後高田の出ですが、第一高等学校入学直前に父母を亡くし、実家の財産管理を叔父に頼んで上京しました。その叔父が帰省のたびに自分の娘との結婚を勧めるのは、「先生」の家の財産を自由にしたいからでした。「先生」は遺産の公債だけを持ち、故郷を捨てます。大半は叔父に取られたということになります。

「自分は他に欺むかれた」から人というものが信用できないのだ、と「先生」の遺書にあります。「造り付けの悪人はいない」つまり叔父も元来の悪人ではないのだが、「金を見ると人は変るのだ」。

「K」も同郷の優秀な学生でした。医科進学を義務づけられていた彼は、一高でも帝大でも文科を選んでいたことを故郷の養家に告白して養家に離籍を通告さ

いでしょ。うか。

「先生」という語感から私たちはかなりの年配の男を想像しますが、彼は亡くなったとき三十五、六歳です。静さんは二十九歳、「私」は二十三歳くらいです。みな若いのです。

「K」が死んだのは十二年前の春、つまり一九〇〇年で、その年初夏に大学を卒業して以来、「先生」は金利生活をつづけ、一度も働いたことがないのです。こういったことは時系列も含め、すべてテキストに書いてあります。

「先生」は「明治の精神に殉死するつもりだ」といひます。では「明治の精神」

関川夏央
せきがわなつお

1949年新潟県生まれ。作家。『海峡を越えたホームラン』（双葉文庫）、『砂のように眠る』（新潮文庫）、『昭和が明るかった頃』『二葉亭四迷の明治四十一年』（文春文庫）、『子規最後の八年』（講談社）、『解説する文学』『昭和三十年代演習』（岩波書店）など著書多数。第2回手塚治虫文化賞を受賞した『坊っちゃん』の時代』（画：谷口ジロー）など、マンガ共作も手がける。

六歳下の静さんを、そのさらに六歳下の「私」に託したということなら、ここにも「資産継承」の物語がひそんでいます。いずれにしろ、とても子供向き、高校生向きの小説とはいへません。

書き言葉のテキストと「向き合う」とは、俗な解釈の追認ではありません。そこに書かれていることをていねいに読む、それに尽きるといひお話でした。

れ、実家からも勘当されました。生活に窮した「K」に同情した「先生」は、日清戦争未亡人が営み、女学校生徒の娘さん（静さん）がいる自分の下宿に住まわせます。しかしやがて、静さんと「K」の親しさに嫉妬した「先生」は、娘さんを、妻に「是非下さい」と未亡人に申込みます。抜け駆けです。それを知った「K」は自殺します。金だけではなく、恋愛を前にしても人は変るのです。

「先生」と静さんは結婚します。しかし「他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなった」「先生」は、仕事をせず、公債の利子だけで「遊民」としてひっそり暮らします。歳月は過ぎ、一九二二年九月、乃木希典夫妻が明治天皇に「殉死」したのを機に「先生」は自殺します――

『こころ』は「恋愛と友情の相克」をえがいた名作といわれますが、ほんとうにそうか。人の心であれ自分の心であれ「こころ」など信用できないという自己嫌悪の小説、あるいは財産相続問題をえがいた経済小説と考えた方が妥当ではな